

て、更に言葉を續け、

「これは、お使者へ物語でござる。よく聞かれよ。今日、六十餘州に弓取りは多
いけれど、政次に勝る者は、一人もないかと存する。その仔細は、去年以來、政
次を待みに思し召されてゐるのは、高麗迄も攻められた、豊國明神のお世嗣ぎで
ござる。又た、政次が内通いたさば、天下分目の戦も、容易く片がつかうと仰せ
られるのは、徳川殿でござる。天下の勝負を政次一人の身に繫けたのは、これ、
思出ではござらぬか。死んでも冥途の面目かと存する。」と、唇邊、得意の笑ひを
浮べつゝ、

「政次が生きてゐましたら、一日で破らるべき大阪も、十日は支へ申さうか。政
次討死と聞えたら、百日保つ大阪も、一日で落城いたしませう。この上は、政次
疾く討死するが、徳川家の御恩に報ゆべき、せめてもの志でござる。」といったの
で、使者は、その心の動かし得ないのを看取し、その儘、辭し去つたといふ。

◎代人は一
便末代名は

◎生きた死
果てを脱れ死
武夫のすば
道も必ら
今誤まる

と知れ
無難
師

◎巧言令
色鮮し仁
孔子

今の世には、利害によつて去りも就きもする小才子が多い。彼等の眼中には、
利あつて義なく、見危授命の道もない。平生の言など、御都合次第、片つ端から
忘れてしまふ。そして、それを伶俐なやり方としてゐるのだから堪らない。どこ
に男子の意氣があらう？ どこに孔子の所謂る成人があらう？

4 齊人鑿足の道

孔子は、その當時を嘆いて、「祝佗の佞ありて、宋朝の美あらずんば、難いかな
今の世に免れんこと。」といった。大正今日の日本がやはりそれで、剛毅木訥の士
は、大概、世に容れられない。さては、多少、心のある者迄が、權門の犬を學
び、勢家の猫に倣つて、只管、その驕心を求め、處世の妙策、こゝに在りとする
のであるが、抑も男子の意氣を奈何である。

昔し齊の國に、一妻、一妻を善はへてゐる者があつた。外へ出る都度、酒、肴

齊人鑿足の道

◎小忍ば
謀を亂る
子大

◎一忍を以て
勇を以て
静以て
動を以て
老を以て
動を以て
静を以て
老を以て

◎高飛ん

で天に
魚淵に
り経る
詩経

◎取取
し取り
風か
古句
悔落落

浦

集

三八二

る所の者あり。匹夫、辱しめらるれば、劍を抜いて起ち、身を挺して戦ふ。これ、勇と爲すに足らざるなり。天下に大勇なる者あり。卒然としてこれに臨んで驚かず、故なくしてこれに加へて怒らず。これ、その挾持する所の者、甚はだ大にして、その志、甚はだ遠ければなり。と。然り、意氣がないのではない。挾持する所が大きいのである。又たいふ、「夫の高祖の勝つ所以、頂藉の敗る、所以の者を見るに、能く忍ぶと能く忍ばざるとの間に在るのみ。」と。然り、然り、眞の意氣と偽の意氣との別る、所以は、能く忍ぶと能く忍ばざるとの間に在るのである。

6 海鼠の怪氣焰

めつたに意氣張る者、必ずしも意氣があるのではない。やたらに氣概張る者、必ずしも氣概があるのではない。達人、高士など、凡そ人生の眞の意義を徹見し

な超脱の士は、如何なる屈辱、侮辱に對しても、怒らず、怨まず、口惜しからず、たゞ笑つて澄してゐるので、さも、意氣、氣概がないやうであるけれど、孟子の所謂、「富貴も淫する能はず、貧賤も移す能はず、威武も屈する能は」ざる底のそれは、實は、これ等の人のものである。意氣張り屋は與からぬ。

昔し、盆徳寺の正損とて、尊き和尚ありけり。一日、齋の戻りに、海邊を通り、海鼠の波に漂ふを見て、歎じて曰く、あゝ、寝たか、覺めたか、尻か、頭か。偶々、受け難き生を受けながら、目なければ、佛像も拜まず、耳なければ、御法も聞かず。口、妙號を唱ふること能はず。漁父來つて、突かんとすれども、逃げんとする智慧もなく、俎に載せられても、跳ね廻る力なし。藁に縛られて、一生を終らん。危ふいかな。現世、尙ほ斯くの如し。況んや來世、覺束なしと、回向して歸りぬ。

蓋し和尚は、海鼠の意氣なく、氣概なきを侮つたのである。耳のない筈の海鼠

海鼠の怪氣焰

三八三

◎保み五口
みは地のつ坊戒に
るは地住坊戒に
古べし極住坊戒に
歌し極住坊戒に
：な家つ主をの

意 氣

三八四

◎庚申
の三猿
：三猿

も、この言葉聞きつけたか。そして些さか瘡すつたか、その夜、海鼠、和尚の枕に立ちて、歎じて曰く、あゝ、寝てか、覺めてか、僧か、俗か。偶々、出で難き火宅を出でながら、目ある故、五つの色に迷ひ、耳ある故、三筋の聲に迷ひ、口、飲酒、妄語を戒しむること能はず、講中、來つて飲まんとすれども、逃げんとする智慧もなく、乗り物に乗りても、自前に拂ふ力なし。借錢に縛られて、一生を苦しめん。小拂ひ、尙ほ斯くの如し。況んや大際、覺束なし。危いかな、危いかな、といひ捨て、歸らんとす。和尚、衣に縫りて曰く、願はくは救へを受けん。

海鼠、するするべつたり坐り、我れ、天地を以て一字とすれば、勸化、奉加の世話も要らず、上に本寺なく、下に末寺なく、中に檀那なければ、納豆の仕入れに氣を揉ます。和尚、我れに耳、目なきを憐れめども、我れ、耳、目なき故に、講中のねすり言を聞かず、檀那の苦い顔も見ず。口なければ、齋

◎住む心所
のな邊を
知きそに
な任せむ
に任ぜむ
るに無難

米の吟味も知らず。富貴に心なければ、大黒を勸請せず。ころころと丸寝して、寒暑の憂ひを知らざれば、お針に氣がねすることなく、在所の姪を呼び寄せざれば、疑ひ受ける覺えなし。現世すら斯くの如し。況んや煎海鼠に於てをやと、粗に水流すが如く、疊みかけ疊みかけいふ聲ばかり寝耳に残り、小疊になつて消えにけり。(脇坂義堂)

面白いかな、海鼠の氣焰！ その心境は、超脱の士の心境である。人間、この心になるならば、富貴、貧賤、夷狄、患難、何もの、如何なる場合にも、泰然、平然、能く男子の眞骨頭を保つことが出来やう。眞の意氣は、寧ろ、するするべつたり、海鼠然たる邊に在るのである。

旅に病んで夢は枯野を駆け廻る。

芭蕉は、全然、趣味に生きて、趣味に死んだのである。

退いて、芭蕉の心境を察するに、彼れは、無我の人であつた。無我の人であつ

たればこそ、能く自然の懷ろに抱擁せられて、その趣味を解し得たのである。左

掲、「行脚の掙しを見れば解らう。

一、腰に寸鐵たりとも帶すべからず。すべて、物の命を取ること勿れ。

一、衣類、器財、相應にすべし。過ぎたるは善からず、足らざるは悪し。

一、人の求なきに、己が句を出すべからず。望みに背くも、然るべからず。

一、好んで酒を飲むべからず。饗應によりて固辭し難くとも、微酔にして止

むべし。

一、他の短を擧げて、己が長を現はすこと勿れ。人を誇りて己れに誇るは、

甚はだ卑しきことなり。

◎の内を虚しくす、大聲を發する所以、大體後素

◎一念清淨なれば天地始る、念昏るれば天地始る

- 一、生ある物は、一枝、一草をも取るべからず。山川、江澤にも主あり。
 - 一、山川、舊蹟、親しみて尋ね入るべし。新たに私の名をつくること勿れ。
 - 一、一字の師恩たりとも忘るゝこと勿れ。一句の理をだも解せずして、人の師となること勿れ。人に教ふるは、己れを成して後の事なり。
- 要するに、「無我なれ」といふに在る。自然の趣味を解することは、無我の人のみの有し得る特權である。叨りに我れを主張し、身量負、身勝手のみを思ひ、私心、私慾を以てその頭を充してゐる者に、趣味の解せやうわけはない。無我は、道德の大本であつて、そして趣味の源泉なのである。

2 鹿の鳴音

右いふ通り、趣味を解することは、無我の人の特權であるが、俗人も、時には無我の境地に入り、従つて、時には趣味を解する。悲しいかな、根が俗人である

受けて、又た一人が、

『それはまだしも、此方共は、得意先が片つ端から倒れまして、實に、氣の減る心地でございます。』としよげる。

續いては、隅の方に坐つてゐる老人が、扇をばちばち鳴らしながら、

『然し又た、親類、縁者どもから、金の無心をいはれたり、印形を頼まれたり、家内連れの居候なども、随分、困つたものでな。』と半分いはず、隣席の男が、

昭憲皇太后
國民を
救ふ道
も遠く
及ばし
遠き境
に

『否々、皆さんの御心痛は、すべて榮耀といふもので、私の辛い事といつたらございませぬ。何うしたわけか、母と家内との仲が悪くて、日がな一日、牛の角突合といつた風で、家の中が燻ぶつてしまひます。仕方がない、家内を離縁しやうかと思へば、何分、幼さい者が二人もある。仲裁をすれば、家内の最負をするといつて、母が心持ちを悪くする。家内を叱れば、他人だと思つて、妾ばかりを邪魔にすると怨む。いやもう、中に立つた柱で、辛い苦しいのと、いひやうもご

『ごいませぬ。』と互ひに胸をさらけ出して、何の事はない、泣言の陳列會である。すると、一人が氣がついて、

『ほんに、もう、鹿が鳴きさうなものだ。話に身が入り過ぎて、聞き洩らしたわけでもあるまい。』と椽の障子を引き開けると、大きな鹿が、庭前に黙然としてゐる。驚いて、

『何だ、そこにゐるなら、何故、先刻から鳴かないのだ？』

鹿は、抜からぬ顔で、

『否、私は、人間の泣くのを聞きに來たので……』

何故の泣言だらう？ 畢竟、頑固に我れを主張し、身最負、身勝手な心から、

出來ない事をも仕終せやうとするからである。そんな心では、鹿の音を聞いた所で、その趣味の解せやうわけがない。趣味を解しやうとならば、一時だけでも、無我の人にならなければならぬ。

の、足駄の趾、雀、猫、鼠、猿。憎むべく打ちも殺しつべく思ふは、蠅、蚊、晝出づるは殊にこそ。

一、貴ぶべき者は、人に異なる人。貴ぶまじき者は、人に異なる様の人。

一、消ゆる時を恕して、雪を見、雫の月を思ひて、夕立に逢ふべし。

一、梅が香を、櫻の花、柳の枝になどは、思ふまじきなり。花の紅、柳の

緑、心を別けて楽しむべし。

一、足れりと思ふべきは、我が身、足らずとすべきは、勤むべき道。

一、楽しきと思ふが楽しきの本なり、争で外に求むべきと、楽しむ翁いふとぞ。

自然界の事物が、一々、趣味を藏してゐることは、斯くの如くである。而も、全篇を通じて、無我の心持ちが認められる。月は、何時とても親しむべし。然れど、過ぎし世を慕ふも苦しく、行末を想ふも憂し。たゞ向ひてこそあらま欲しけ

◎梅の香に花を
梅の香に花を
梅の香に花を
梅の香に花を
梅の香に花を

れ。といひ、「消ゆる時を恕して、雪を見、雫の月を思ひて、夕立に逢ふべし。」といひ、「梅が香を櫻の花、柳の枝になどは思ふまじきなり。花の紅、柳の緑、心を別けて楽しむべし。」といふ、皆それである。

4 隠居の疴性

風流を歡び、趣味を解する程の者は、何事に就けても、無我の心持を失はず、温情を以て人に對すべきで、風流を談する口で、無闇に妻子を叱つたり、趣味を説く口で、奉公人を怒鳴りつけたりするのは、矛盾の甚はだしいものとすべく、まことは、没風流、没趣味の人間なのである。

或る隠居、茶が好きで、二疊臺目の席を建てた。撥込天井に突上窓、宗匠の好みとあつて、至極、さんぐりと出来上つた後では、疊屋が疊を入れる。表具屋が腰張りをするやら。障子を張るやら、それも手離れになると、茶事にのみ使ふ下

隠居の疴性

◎思へ人
思ひも
思ひが
思ひに
思ひく
思ひて
古へ歌

女、断者にいひつけて、叮嚀に掃除させ、さて、隠居の検分となる。それがなかなか難しいので、袂から虫眼鏡を取り出し、障子の棧の隅々を、穴の穿く程覗き廻つて、

「これでも掃除が。汚い！ 汚い！ 何う客がなるものか。俺の居間にある掃除道具を持つて来い。俺がする。いやはや埒の明かぬことぢや。」と叱りつける。断者は赤い舌をそつと出して、

「はい！」とばかり、所謂掃除道具を取つて来る。竹を細く削つた魚串様のものが一本、絹雑巾が一つ、寒竹の小さい火吹竹が三本、珍らしい掃除道具ではある。

隠居は、先づ、魚串の先へ絹雑巾を巻いて、障子の横棧を一本づつ叮嚀に拭き、隅々は、彼の寒竹の火吹竹で、

「ぶつ！ ぶつ！」と吹く。

吹き終ると、

「やれやれ、これで気が済んだ。」と、席の真中に座を占めて、煙草盆引き寄せ、灰吹きを叩きながら、上下、左右を見廻すと、折柄、夕暮近い頃で、突上窓から日が射し込む。隠居は、何を思つたか、顔を溢め、聲荒々しく断者を呼んで、

「横町の桶屋へ行つて、棧の一番盥を取つて来い。」と命じ、断者が心得て取つて来ると、

「これッ！ 其邊に置くな。井戸側へ持つて行つて、切藁で、内も、外も、底廻りも、くつきりと洗つて、随分綺麗な水を汲み込んで、長吉と手舄きにして、この櫓打ちの上へ、そつと持つて来るのぢや。」と命じる。断者は、

「はいはい！」と棄直に答へ、その通りにして持つて来る。隠居、今度は下女を呼んで、

「竹よ、俺の居室に、新らしい朝鮮團扇がある。取つて来い。」といひ、取つて来

ると、隠居は、やをら、双肌脱ぎになつて、しかつべらしく團扇を提げ、盥の水へざんぷりと突き込み、雫の滴るのを、彼の日影の中へ入れて、上げたり、下げたり、招くやうな手つきをする。下女や厮者は、不思議でならない。

「まさか、氣が狂れたのぢやあるまいが……」と思ひながら、氣味悪々、

「御隠居さん、何をなさるんです？」と尋ねると、隠居は、

「喧ましい。日射しの中に、細かい埃が見えるぢやないか。それを除る分別ぢやと思へ。」腹立ち聲で答へたとか。

驚き入つた疝症病み、平素の氣難かしさが想ひやられる。家内の者は、頭止、引切なしに鳴る雷に、毎日、頭痛針巻きで暮してることだらう。畢竟、我が儘勝手の手丁簡が亢じて、こんな疝症病みになつたので、隠居に、茶事の眞趣味が解るか、否か。

◎楊子の隔
電箱の
た波ふ
…便診…

5 表太の奇行

昔し、漢の蘇武が匈奴に囚はれて、苦節を守つてゐると、降將李陵は、

「人生は、朝露の如くに儚ないものぢや。貴殿は、自分で自分を苦しめられるので、實に詰らぬ。拙者同様、この國へ降つて、富貴を求められては如何？」と忠告した。不忠不義、悪むべしであるが、名利の途に徨々として、片時も肩を休めることを知らない俗物の爲めには、この語、反省の料でなければならぬ。趣味を解する者の爲めには、人間到る處、快適の地があるのである。

◎人生は如何ぞ
朝露の如く
苦しむ
…なる…
…なる…
…なる…

貞享、元祿の間、京都新町四條の北に、太兵衛といふ崎人があつた。表具師を業とし、人は、表太とのみいひ習はした。老いて後には、男の子が三人あつて、それぞれ、家を持つてゐる許へ、一晚づつ泊つて歩き、夜が明けると、野山に交りつゝ、春の花、秋の紅葉は、いふも更ら、月の夕、雪の朝、一日として怠らな

◎人生は
行樂せむ
の行樂せむ
貴を待つ

何の時ぞ
揚梅ぞ

◎春雨如人行
はしる如く
はるる如く
揚梅は
秋月を
揚梅は
揚梅は
揚梅は

● 味

四〇二

かつた。だから、花の消息などに通じたことも人一倍で、

「どこの花は、何時頃、咲きませうか。」と尋ねると、

「然やうさ、この何日頃でせうよ。」と答へる言葉が、必らず適中して違はなかつた。四季共、黒い頭巾を冠り、身の丈に餘る杖に仕込んで着を入れ、瓢箪状の銀

の器に酒を入れ、長々と提げて、腰を二重にして歩いた。或る年の春、仁和寺の

邊で驟雨に遇ひ、誰れも、彼れも、逃げ惑つて駆け走る中に、表太のみは、極め

て長閑な面持ちで、

「降るは春雨……」と歌ひ、悠々然、常の如くに歩いた。花の下で、たゞ一人、

酒を飲みながら、眼鏡をかけて往來の人を見、又た、何か書いたものを携へ、木

の枝にかけて友とした。當時、京都崎人の第一名であつた。

その戯詠に、

世は澄めり我れ一人こそ濁り酒、酔るば寝るにてさうらうの水。

以て、その酒脱を見ることが出来やう。又た、書畫の鑑定にも長じてゐたこのこと。

表太は、市井の一人商人に過ぎない。而も、その行動の風流さ、月花の趣味を解した所など、想つて優しい心地がされる。人間幸福の一要素、又た、存してこれ等の邊に在るのである。

6 文晁の鶴

式金の大部分は、人格の低劣な、士人の齡ひすべからざるものとせられ、識者の間には、殆んど穢多的に扱はれてゐるが、こゝに不思議は、彼等が頻りに、書畫、骨董の類を買ひ入れる事である。彼あした俗物に、書畫、骨董の趣味が解るだらうか。恐らく解るまい。彼等は、たゞ、金のあるに任せて、家の飾りだ、位のみ考へて、得體の解らぬ品を、とんとん、買ひ入れるのである。

◎眞假の
人

文晁の鶴

四〇三

だから、時々、滑稽な話がある。或る書畫屋、俗に旦那筋の成金から、この程、五六點、買ひ入れた品がある。見に来てくれとのこと、

「では……」と行つて、座敷へ通され、暫時、主人を待つ間、床の間を見ると、文晁の鶴がかゝつてゐる。筆勢から何からが、何うやら眞物らしい。所へ、

「入らつしやいまし、お茶を一つ。」と女中が、侷める。

「はい、あり難う！ 立派な御普請ですね。」

「否……まだ、大工が毎日入つてゐるのですよ。」

「然うですか。」と再び掛軸を見て、「文晁は、いゝですなあ」といふと、女中は、

「あら、貴方、文鳥ぢやないでせう？ 鶴でせう？」驚き顔にいふ。骨董屋は、

思はず知らず、

「あは、、、。」と高笑ひ。女中は、

「何ですの？」と、ぢろり、此方を見て、立ち去る。その後姿を見送りながら、

又も、

「あは、、、。」と笑ふ折柄、主人が出て、

「何だ、何だ？ 女中に何かからかつたのかい。」

「否、私が、今、あの掛軸を見て、文晁はいゝ、といひますと、ありや、文鳥ぢやない、鶴だつてわけです。あは、、、。」

主人の成金、同じく、

「あは、」と一笑して、「仕方がないさ、女中だもの。鶴と文鳥とは、嘴で分るんだけれど……」との言葉に、世辭家を通つた骨董屋も、流石に返辭が出来なかつたとか。

これは、無論、一場のお笑ひ話で、ほんの悪口に過ぎないだらうが、成金の没趣味は、大抵、こんなものである。天下の名器、珍品が、彼等の玩弄物になり、藏の中へ收まつて、再び世に出ないことを思へば、可惜の極みである。無心の器

物にも、やはり、遇、不遇があるか。抑も、當世流行の成金は、趣味の賊といはなければならぬ。

第二十一 貧 富

1 僧桃水の快生涯

富貴を望んで、貧賤を厭ふのは、人情、已むを得ない所ではあるが、然し今の人は、甚はだし過ぎる。孔子は、「不義にして富み且つ貴きは、吾れに於て浮雲の如し。」といったが、今の人は、富貴を求めると於て、決して義と不義とを問はない。自ら好んで富貴を捨て、貧賤のどん底、乞食の群へ投じ去つた桃水和尚の風を聞いたなら、彼等は、驚いて逃げ出すも知れない。

僧桃水、諱雲關、筑後の國の人である。肥前の國島原の禪林寺に住持する中、一朝、感ずる所があつて、跡を隠して後は、久しく行方を知る者がなかつた。

日頃、和尚に歸依してゐた尼の一人は、それを悲しんで、方々、捜し廻つた末

◎利を見
て義を思
ふ………
孔子

◎富貴は
我が願ひ
に非ず
帝は期
すべから
ず明陶

◎己れに
克ちて禮
に復るを
仁と爲す
孔子

◎総た
衣て狐貉
をた
者と立ち
て恥ぢる
由はそれ
孔子

ぶべき事でもなければ、學ばるべき事でもない。たゞ、めちやめちやに富貴を希ふ今の人は、古へ、富貴を見ること糞土の如き心得でゐた人のあつた事實を顧みて、富貴以外、人間、別に天地のあることを悟るべきである。

2 火中の綿服

論語二十篇、要するに、平氣でゐよとの訓へてある。貧富貴賤に對して平氣、毀譽褒貶に對して平氣、吉凶禍福に對して平氣、その他、一切の運命に對して平氣である。これが論語の要旨とする所で、これを能くする者、これを稱して仁者といふのである。

所が俗人は、なかなか、平氣でゐられない。貧富に對して、最も平氣でゐられない。平氣でゐられない所から、窮して溢し、怒の畏にかゝるやうな、飛んだ失敗を演じ出す。

些と足りない。そして、極めて貧しい男があつた。或る親切な人から、一枚の綿服を贈られ、それを着てゐると、世間の人が、

『おいおい、お前は、元と、大盡つ子ぢやないか。何だつて、そんな木綿物を着てるんだい？』

『第一、お前には似合ないよ。』などとからかふ。男は、つひ、その着物が可厭になつた。

すると、悪戯者があつて、

『お前に、縮緬の衣服をやらうか。』といふ。男は、目を圓くして、

『何卒、願ひます。私は、着てるこの衣服が、可厭で仕様がなけれど、着替へがないので、我慢してゐるんですよ……眞實、くれますかね？』

『やるよ。俺のいふことを聽けばね。』

『聽きますとも。』と力を入れる。

當る身
よりも詔
はで、黄
しき身
そ心安
れ……古
歌……

「然やう、然やう。」との言葉に、梨一は、漸く納得して、
「では、お望みに任せませう。」と、こゝに丸岡へ下つた。
儒者としての招聘である。時々、物を語はれはしたが、一度も、出仕といふこ
とはなくて、三年を経た。候も、

「もうよからう。」とあつて、梨一に、儒書の講義を命じた。梨一も、多年の厚恩
を顧みては、可厭ともいへず、命に應じやうとしたが、脇差のみで、帶すべき刀
がない。

「如何いたしたもので？」と當惑顔にいふと、使ひの士は、

「何、いと易いこととござる。御心配には及び申さぬ。」と、早速、その佩刀を贈
つた。梨一は、それを帶して出仕した。清貧の状、察すべしである。

斯やうな心から、俳諧を好んで、人にも知られた。もとの水と題する著書があ
つた。又た、芭蕉の奥の細道を註したのもあつた。京都の蝶夢法師は、梨一の

◎花鳥風
月一とし
ら俳諧な
らぬはな

し……小
林一茶

◎三遊苑
に就けど
も松菊輪
ほ存せり
明……陶淵

俳友である。或る時、伊賀の俳人桐雨と共に、梨一を訪ねたが、容易に目づから
ぬ。聞いた邊りを、そこ、こゝと捜し廻ると、家も疎らに、人に問ふべくもない
處に、一軒、築地が崩れて、犬の通ふ穴の明いた家がある。その穴から覗いて見
ると、庭には、得も知れの草木が生ひ茂り、人氣もなさうに見えて、而も、俵
物などが澤山積んである。

「こゝらしいな。」と察知して、つと入り、案内を乞ふと、

「おう！」と答へて出て來たのは、果せるかな、梨一であつた。隠士的の清貧生
活が偲ばれる。

けれど、梨一は、全然の隠士ではなかつた。或る時、越前の國の兵庫といふ地
の代官となり、秋收を聞くことがあつたが、百姓等は、梨一の正直なこと、無慾
なことに感じ入り、それを徳として、梨一の歿後、一小祠を營み、梨一明神と唱
へて、その像を崇め、秋毎に祭つたとのことである。

は助けてやるよ。」と困り顔にいふ。

狸は急に勢ひづいて、

「化けるのは、私の専業、いと易いことです。命を助けて下さるとなら、何、二分には限りません。外見のい、やう、奮發して一兩に化けませう。」といふが否、狸の姿は一變して、一兩の金が顯はれた。

獵師は、ほつとして、

「やれやれ、助かつた。」と大喜び！ それを手早く紙に包んで、

「ほんの志ばかり……」と和尚へ出す。和尚は、

「あい、あり難う！」と袂へ入れて、その儘、寺へ歸つて行く。

後では、獵師、狸の歸るのを、半日程も待つたが、何うしたことか、歸つて來ない。

「はてな！ 今に歸らない所を見ると、賈せ金が露見したかな。それこそ大變、

◎知らぬ
俚が佛
諺……

◎鳴子
已が子
風が子
てに子
懸ぐ心
か歌な
古……

俺の首が飛んでしまふ。何しろ氣になることだ。」といふので、そつと様子を見に行つた。

すると、道の傍らに、彼の狸が、鉢巻きをし、半死半生の體で倒れてゐる。獵師はびつくり、

「愈々、賈せ金露見だな。大變！ 大變！」といひながら、抱き起して、水をやる。狸は、漸く正氣づく。

「何うした？」

「いやはや、ひどい目に逢ひました。」と、狸は、苦しい息を吐いて、

「貴方が何時も包む通りに、二分に化けてればよかつたのに、少しの外見を飾りたさから、一兩に化けたばかりで、和尚さんは、私を袂へ入れてからといふもの、一寸も放さず、色々と捻くり廻して、この時節柄に、何時もより金の多いのは、不思議ぢや、合點が行かぬ、といつて、果ては指先に力を入れて、摘んで見

狸の花け損ひ

◎正直の
頭に神宿る

◎鶴は物に
の着すに人
の生れたる
はたの儘
の探れこそ
古歌よき

たり、歴えて見たり、爪を立て、見たり、叩いて見たりするので、私は、五臟六腑もひつくりかへり、手も、足も、もうもう、折れてしまひさう、その苦しさといつたらない。既に一命をも失つて、正體を見はさうとしましたが、少しの隙を得て、やうやうこゝ迄逃げ延びて、目を眩してしまひました。僅かな外見からの苦み、今更ら、後悔に堪へません。又た、貴方にしても、金がなければ、ないで済む。後から寺へ届けても、何の苦情があるものですか。ないものをあり顔して、賈せ金使ひの罪に陥ちるなどは、實以て、馬鹿な話だ。一念の心得違ひから、飛んだことになりました。お互ひに、今後を慎しむとしませうよ。」と涙ながらに語つたとか。

世の小人のする事が、滔々として、皆、これである。それといふのが、貧乏を恥ぢ過ぎるから悪い。宜しく態度を改めて、人間の價値を定める標準が、たゞ人格の如何に在ることを諦観し、貧富以外に超然たるの修養を積むべきである。

5 龜田窮樂の洒落

◎人のみは
の生くるに
て非ざる
者に基す

金がなくて暮される世の中ではない。金を儲けるのはよい、溜めるのはよい。たい、その金に執着し、その金に心がこびりつき、その金に使はれるに及んで、弊害が百出するのである。

龜田曳尾は、書を以て鳴り、窮樂の號で、世に知られた。物を物とも思はない曲者であつた。京都の人で、彼の有名な賣茶翁と同じ小路に住んだ頃は、莫逆の交はりを結び、彼れ、茶を飲めば、此れ、酒を飲む。時としては、酒を飲まない賣茶翁が、貧乏徳利を提げて、酒屋へ行くこともあつたといふ。

賣茶翁は、後ち、双ヶ岡の東へ轉居したが、折柄、梅雨、連月に及んで、茶を買ふ客もなく、錢筒、傾盡して、既に食ふ物もなくなつた時、それと聞いた窮樂が見舞に來て、米、錢を贈つた。賣茶翁の謝した偈が、その偈語に見える。

◎おぶち
の人を
訪ねる
定かな

無茶無飯竹筒空。恰似波臣車轍窮。

多謝特來親賑濟。簞瓢充得養衰窮。

(茶なく飯なく竹筒空し。恰かも似たり波臣車轍の窮。多謝す特に來りて親しく賑濟するを。簞瓢充し得て衰窮を養ふ。)

身も世も捨てゝゐた賣茶翁も、流石に嬉しかつたと見える。

或る時、大きな酒樽を据ゑ、近所の貧乏人、男女の區別く、呼び集めて、酒を飲ませてゐる。來合せた人が、目を刮いて、

「先生、今日は何です？」尋ねると、

「いや、屏風を書いてやつた禮に、酒をくれたから、皆なに飲ませるのぢや。」と

答へ、わけの解らない歌などを諷つて、大に興に入る。果ては、樽の下から、一封の金を目つけ出すと、

「お、よい下物があつたぞ。」と、一文残さず、一同へ分配した。金錢に淡かつ

て世を捨
なきもは
思ふ降ど
も雪の
る日は
くこそ
歌れ古

命を種す
は貨か
けは種
し受は
すては
しんば
中れば
論る

たことは、すべて、斯くの通りであつたとか。

その自畫談に、

味増搗かす肴難かし米要らず、食はず貧樂酒はちよこちよこ。

又た、「窮樂すきもの」と題して、

煙草、相撲、競馬、錢。酒は、予が糧なれば算へず。

俳諧もやつた。正月の句に、

正月はたい幾年も面白し。

うかうかと我が宿へ來る春とし。

その幼い氣象を見るべきである。

窮樂は、好きな物の一つに、錢を擧げた。蓋し、偽はらない告白で、この點に

於ては、世の俗人と、何等、異なる所はなかつた。けれど、窮樂は、金に執着しなかつた。一旦、手に入れた金を、惜しげもなく使ひ捨てた所から推して、彼れ

亦た、超脱の士であつたことが解る。

6 鬚剃り志願

金に執着し、貧富、貴賤などいふ物の爲めに、貴重な心を勞するのは、自ら悔
るの甚はだしいものである。讀書幾年、幾十年、富貴の地を獲得して、それを成
功と心得るなどは、愚昧の至りとしなければならぬ。人間には、もつと尊い仕事
があらう。

昔し、反賊が起つて、勢ひ、猖獗を極めた。形勢重大と視た王は、親から征討
の軍に臨んだが、容易に平定することが出来ず、却つて、賊の重圍に陥り、あは
や、一命を失はうとした時、近臣の一人が王の馬前に躍り出て、獅子奮迅の働き
をして、賊を追ひ散し、王を九死一生の間から救ひ出した。

王は、限りなく喜んで、亂後、これに重賞を授けやうとして、

己の者を知れど、人の者を知れず
己の才を知らざれば、人の才を知らず
己の徳を知らざれば、人の徳を知らず
己の言を知らざれば、人の言を知らず
己の行を知らざれば、人の行を知らず

◎その感
及ぶ
べからず
論す

「今度の其方の働きは、實に披群といつてよい。就いては、何か褒美を遣はした
と思ふ。所望があらば、遠慮は無要、何なりと申し出よ。」

すると、彼の者は、恐る恐る頭を擡げて、

「何卒、王様の鬚剃り役を仰せつけられたうござりまする。」と、これは又た、意
外の所望である。

「それなら、易い事ぢや。」とあつて、王は、その願ひを容した。
傳へ聞いた同僚一同は、

「あれ程の手柄を立てたのだから、大臣になるのも、貴族になるのも、それこそ
心の儘ぢやないか。乃至、金銀、財寶、莊園、邸宅、何を望んでも、きつとお容
しがあるものを、賤しい鬚剃り役を志願するとは、何うした了簡だらう？」

「眞實だ、馬鹿な男だ。」と語り合つて、大笑ひをしたとか。
確かに馬鹿げてゐる。眞實、大笑ひである。けれど、折角磨き上げた心を、區

◎過つては改むるに憚るる孔に

貧富

々たる富貴の爲めに費して悔いなきものは、より以上に馬鹿げてゐはしないか。今の人は、到底、貧富に對するその態度を改めなければならぬ。

第二十二 死生(その一)

1 小西來山の辭世

◎生する者は必ず死あり、死する者は必ず生あり、終に始に、法言

人は、超脱しなければならぬ。利害得失、吉凶禍福、すべての運命から超脱して、初めて眞の生活があり得る。超脱は、容易の事ではない。殊に死生から超脱するのは、たゞこれ、達人のみの能くすべき所ながら、心の持ち方次第、何人も死の恐怖を緩めることだけは出来るであらう。

來山は小西氏、十萬堂と號し、俳人で、大阪の南、今宮村に隱棲した。人と爲り、濶達不拘、偏へに酒を好み、種々、奇行のあつた中に、或る夜、酔つた餘りに、變な風をして歩いてゐると、目付に捕まり、牢へ入れられた。名も處もいはないので、怪しい者と思はれたのであらう。けれど、門人に尋ね出され、その願

ひによつて、事なく放免された。

その時、門人が、

「牢の中では、嘸、お苦しかったでせう？」といふと、來山、

「何、飯を炊く世話がなくて、結句、樂ぢやつた。」

或る年の大晦日に、門人から、元日の雑煮の具を調じて贈ると、

「この頃は、酒一方で、食ふ物が無い。好い物をくれた。」といつて、即時、煮て食つて、

◎飢ゑてはひきて
食ひてはひきて
はひきてはひきて
むねたはひきて
むねたはひきて
むねたはひきて
むねたはひきて

我が春は宵にしまうて除けにけり。
と口號んだ。

蓋し、妻もなかつたと見えて、女人形と題する文中に、「酒を飲まぬは心憂けれど、賢しげに物いはぬはよし。」といひ、姑は、何處の土ぢや。あゝ、現なの妹脊物語や。」と筆を止めて、

折ることも高根の花や見たばかり。

文章は、上手であつた。

殊に俳句には、優れたものゝ多かつた中に、「その物を育てんとて、その物を損ふ。」との詞書の下に、

笥を竹にせんとて竹の垣。

とあるなど、その言行に思ひ合せて、俳人といふよりも、寧ろ、老莊者だつたのである。

だから、その辭世も、

來山は生れた咎で死ぬるなり。それで怨みも何も彼もなし。

と、死生を一笑し去つた心持が見えてゐた。

げに、死生は、一笑し去るべきである。人が死ぬのは、死ぬ時に死ぬのではなく、生れたその時から、時々刻々に死ぬのである。だから、死を悲しむなら、同

◎世間何事
何事りも
何事りも
何事りも
何事りも
何事りも
何事りも
何事りも

死 生
大に戒心を要する。

3 赤穂義士の超脱

古への英雄、豪傑は、すべて、死生を超脱してゐた。人間、死を見ること歸するが如きに及んで、初めて震天撼地の大事業があり得るのである。

例へば、戦國の英雄上杉謙信は、夙に宗謙禪師に參じて、悟る所あり、その謙信の名は、禪師の偏諱を取つたものらしく、又た、不識庵の號は、達磨と梁の武帝との問答に、武帝が、

「朕に對するものは誰れぞ？」と尋ねると、達磨は、たゞ一言、

「識らず。」と答へて、少林寺へ去つたといふ、所謂、達磨不識の公案に起ること。常に家來を戒しめて、

生を必する者は死し、死を必する者は生く。要は、たゞ心志の如何に在り。

生れず、百年
なるも、こ
の日は、最
過ぎ易し
譯：菜根

◎山川の

末に流る
い溺れし
みこを捨
ふはそ浮
歌れぬ古

◎天と地
りなく、ま
す人、は時
あり、は時
あつて、具

能くこの心を得て、守持すること堅ければ、火に入りて焼けず、水に陥りて溺れず。何ぞ死生に關せん。予、常にこの理を明かにして、三昧に入れり。生を惜み、死を厭ふは、未だ武士の心膽に非ず。

と、説き死ぬ時には、極樂も地獄も共に有明の、月ぞ心にかゝる物なき。の辭世があつた。

當の敵手武田信玄も、紹喜禪師に參じて、死生一如の理を諦觀し、臣下に諭して、

參禪に別の秘訣なし。たゞ、生死の切なるを思ふのみ。といつた。遺偈に、

大底還他肌骨好。不塗紅粉自風流。
(大底還りて他の肌骨好し。紅粉を塗らずして自ら風流。)

赤穂義士の超脱

託すの間に
然たるこ
と驕る隙
を馳せて
を過ぐる
に異なる
莊子なる

死 生

四四〇

その悟達を想ふべきである。

その他楠正成は、平生、莊子を愛讀し、又た、雲樹寺の孤峰、大徳寺の宗峰二國師に參じて、粗ぼ、宗趣を探り、一日、南都に遊び、片岡の邊りで一禪者に逢ふと、これに必要を乞うた。僧の曰く、

「公の名は如何？」

「正成。」と答へると、

「者個、これ、什麼？」と一喝する。正成は、言下に省悟した。そして、湊川へ

赴く前日、楚俊禪師に謁して、

「生死交謝の時如何？」と尋ねた。

禪師、

「兩頭、俱に截斷して、一劍、天に倚りて寒し。」

重ねて、

「畢竟、作麼生？」

禪師は、威を震つて、一喝した。正成は、忽ち悟る所があつたとか。

大内義隆は、逆臣陶晴賢に襲はれて、自殺する時、

討つ人も討たる、人も諸共に、如露亦如電應作如是觀。

の辭世を詠んだ。平生、玉堂和尚に參じて、幾分悟つてゐたのである。

北條時頼は、夙に禪を宋僧道隆に學び、爲めに建長寺を造つた。又た、最明寺

を造り、削髮して、それへ隱居し、弘長三年を以て卒したが、その時の偈に、

業鏡高懸。三十七年。一槌破碎。大道坦然。

(業鏡高くかゝる、三十七年。一槌破碎すれば、大道坦然。)

蓋し、享年三十七歳であつたのである。

時頼の子時宗も、禪を好み、元寇の役に出かける時、建長寺に佛光禪師に謁し

◎打ち下す
水の古
しに水も
句

赤穂義士の超脱

四四一

◎人生古
へより誰
れか死な
からん誰
丹心な留
め取らん
汗青を照
文天祥

「大事、到れり。用心如何？」と問ふと、禪師、

「益直に進前せよ。」と教へた。時宗は、威を振つて、喝一喝した。禪師が、

「真にこれ獅子兒、能く哮吼す。」といふと、時宗は、拜謝して去つたといふ。

古英雄、古豪傑が、斯く、揃ひも揃つて、禪を學んだのは、これによつて、死生を超脱しやうとしたのである。死ぬことを恐れるやうでは、何うして、大事業が成されるものではない。赤穂義士が、彼の難事を成し遂げ得たのも、一同、命を投げ出して事に當つたからである。

義士の棟梁大石良雄の知人には、方外の人が多かつた。曾祖父良勝は、最初、男山八幡の大西坊に入り、僧になる筈だつたのが、十四の時、去つて江戸へ行き、十八の時、浅野家へ仕へたのである。その關係から、良雄の弟専貞は、同じく大西坊へ入つた。

又た、赤穂華岳寺の惠光和尚、同新濱正福寺の良雪和尚、周世村なる大石家縁

◎安禪必
らずし須
山林を心
るすを却
頭滅却火
すれば快
し亦た涼
川澤師

故の寺神護寺などは、良雄と昵懇の間柄に在つた。中にも良雪和尚は、椿事突發以來、種々、良雄に論ず所があつたと見えて、討入前、右の三和尚へ寄せた書中に、

良雪様、去年以來の御物語、失念仕らず、具さに存じ出し、この度、當然の覺悟に罷り成り、忝けなき次第に御座候。

とある。良雪和尚が、何事を以て良雄に語つたかは、素より不明に屬するが、談の死生問題に及んだとは、疑ひのない所である。

獨り良雄のみではない。義士の面々、何れも死生を超脱してゐたので、切腹前日の事である、一黨の中、重なる十七人を預かつてゐた細川家の士、接伴係りの堀内傳右衛門が、その詰所に宿直してゐると、夜も大分更けた頃、次の室なる富森助右衛門、大石瀨左衛門などが聲をかけて、

「傳右衛門殿、何卒これへ……。」といふ。何氣なくそれへ行くと、過半は、既に

(百戦功なし半歳の間。首邱幸め得て家山に返る。笑ふ儂が死に向つて
仙客の如くなるを。盡日洞中棋響閑かなり。)

げに南洲は、仙客の心を以て、萬事に當つた人である。
秦平の今日、命を的にすべき出来事は、先づないであらう。けれど、絶無とは
いはれない。左と右、死を惜しまない迄に超脱してこそ、人は、能く大事に堪へ
得るのである。

第二十三 死 生 (その二)

4 北叟笑み

◎死のやがて
死の目撃し
すも見えて
すも聞か
古の聲

人間僅か五十年とは、誰れでも知つて、確とは知らない。知らない證據には、
なべての人が、千年も萬年も生きるやうな顔をして、名利の途に狂奔しつゝある
ではないか。
けれど、人は、到底、死すべきものである。杜甫が玉華宮を詠じた詩に、

溪回松風長。 蒼鼠竄古瓦。
不知何王殿。 遺構絶壁下。
陰房鬼火青。 壞道哀湍瀉。
萬籟眞笙竽。 秋色正瀟灑。

北叟笑み

◎土と美人
祝ちんや
の假つる
は假つる
の假つる
社や
南

美人爲黄土。

況乃粉黛假。

當時侍金輿。

故物獨石馬。

憂來藉草坐。

浩歌淚盈把。

冉冉征途間。

誰是長年者。

◎人間皆
同い年
堂臨坂義

美人も、黄土に化してしまふ。古來、一人として不死の人のないことを思へば、

「冉冉たる征途の間、誰れか是れ長年の者ぞ。」と問ひたくなる。「人間皆同い年。」である。而も、無常迅速の状は、電光、石火の急なるよりも急で、朝を以て夕を

◎儚なし

さへ計られぬ。實に脆い、實に儚ない。それを思へば、人生の事は、悲しむべき事、多く悲しむに足らぬ。喜ぶべき事、多く喜ぶに足らぬ。

や今朝の立見
影人の立
影人の立
夕暮の立
古の立
古の立

有漏路より無漏路に歸る一休み、雨降らば降れ風吹かば吹け。

である。足を空に、名利をこれ追ふなどは、殆んど正氣の沙汰ではない。

昔し支那の唐の世に、北叟といふがあつた。世に出て、名利を貪る心もなく、

私を計つて、財寶を積む思ひもない。都の北に、柴の庵を結んで、身を宿し、麻

の衣を着て、寒を防ぎ、草を摘み、菓を拾つて、飢ゑを慰めつゝ、日夜を過し、

年月を送り、何か喜ぶべき事を見ても、少しく笑み、悲しむべき事を聞いても、

少しく笑むといふ風。といふのが、悲みも喜びも、決して久しいものではなく、

夢になり終るべき理を知つてゐたからである。少しく笑むことを、「はくそ笑み」と

といふのは、即ち、北叟笑みの意であらう。後鳥羽法皇は、隱岐御配流中、畏

◎樂しん
淫せし
哀しん
傷らす
論語

外の騒ぎも知らぬげに、三昧に入つてゐた。所へ、元兵が突入して、刀を揮つて禪師の頸に擬した。禪師は、神色少しも變せずして、徐ろに偈を説いた。

坤乾無地卓孤筇。喜得人空法亦空。

珍重大元三尺劍。電光影裏斬春風。

◎身も消えて心も消えては渡る世は、劍の先も觸らざり無難

(乾坤地の孤筇を卓つるなし。喜び得たり人空法亦た空。珍重す大元三尺の劍。電光影裏春風を斬る。)

本來空のこの身、斬るも斬られるもない。恰かも、電光の閃めく中に、春風を斬るが如くである、との意であらう。元兵も、恐れ入つてしまひ、懺謝して、他へ向つた。

時に、日本の北條時宗は、父時頼に尋いで、心を新道に寄せ、幣を具へて、有徳の禪僧を聘請した。禪師は、選ばれてこれに應じ、祥興三年五月發足、六月晦日、太宰府へ到着した。實に我が弘安三年である。時宗、これを郊迎し、建長寺

◎相模太
頼如磨の
山陽

に置いた。

翌四年、元兵十萬、筑紫へ來襲し、時宗、出陣に臨み、就いて示しを乞うたことは、前にも記した。

後ち三年、時宗は卒した。嗣子貞時、續いて禪師を崇信した。九年八月、病ひあり、九月三日、親から遺書を作つて、貞時以下の故舊、諸檀に訣し、夕刻、偈を示した。

諸佛凡夫同是幻。若求實相眼中埃。

老僧舍利包天地。莫向空山撥死灰。

(諸佛凡夫共にこれ幻。若し實相を求むれば眼中の埃。老僧の舍利天地を包む。空山に向つて死灰を撥すること莫れ。)

この夜三更、衣を着更へて端坐し、筆を執つて、來亦不前。去亦不後。百億毛頭獅子現。百億毛頭

◎老僧の
舍利天地
の包む光輝

死 生

獅子吼。

四五八

(來れども亦た前まず。去れども亦た後れず。百億毛頭獅子現はる。百億毛頭獅子吼ゆ)

玉の梅の外にて
なはしは外にて
なきは外にて
身のなきは外にて
しななきは外にて
離師無べ

書し終つて寂す。壽六十一。勅して佛光國師と謚す。禪師、平生、衣を脱いだことはなく、上から物を襲ねて夜分に備へた。その威儀精恪なることは、斯くの如くであつたといふ。

佛光禪師のみではない。或る僧も、白刃、將に頭上に下らうとした時、

四大本無主。五蘊本來空。

將首臨白刃。

猶如斬春風。

(四大本と主なし。五蘊本來空。首を將つて白刃に臨む。猶ほ春風を斬るが如し。)

と澄してゐた。死生一如の理を悟れば、何人も、この境地に至ることが出来る。

何人も、

身も消えて心も消えて渡る世は、劍の先も障らざりけり。

である。小さき我れに執すればこそ、生の、死のといふけれど、無我の人に、決して死の恐怖がないのである。

6 盃中の蛇

人の恐怖は、死に於て極まる。死、果して然く恐怖すべきものだらうか。

◎色即是空
若心經

佛敎では、「色即是空」と説く。色は、千差萬別、窮まりのない、現象界の事々物々のことで、それ等のものは、畢竟、平等一如、何等、差別のない空、即ち真如に歸してしまふ。真如は、宇宙の本體である。宇宙の本體たる真如は、あるといへばあり、ないといへばない、譬へば、虚空の如きもの、乃で、空といふのである。そこには、大小もなく、輕重もなく、色もなく、聲もなく、香もなく、

◎圓經

盃中の蛇

四五九

つや氷と隔
つれど川
つじつと
同水谷川
古の歌

死 生

四六〇

味もない。即ち、一切の差別がない。たゞ、人の心がこれを差別と観するのである。大乘起信論にいふ、

一切諸法は、たゞ妄念によつて差別あるなり。若し心念を離るれば、一切境界の相なし。この故に、一切の法は、従本已來、言説を離れ、名字を離れ、心念を離れて、畢竟、平等にして變異あることなく、破壊すべからず。たゞこれ、一心なるが故に、眞如と名く。

と。今少し簡單にいへば、

迷故三界城。 悟故十方空。

本來無東西。 何處有南北。

(迷ふが故に三界城。悟るが故に十方空。本來東西なし。何の處にか南北あらん。)

といふわけである。迷ふから、差別がある。悟つて見れば、差別がない。

◎心佛及
衆生はこ
の三は
差別なし

◎酒を一杯
二杯を
飲杯を
三杯を
飲杯を
飲杯を
飲杯を

だから、人がこの世界を差別と観するのは、自分の影に吠える犬の愚に似てゐる。差別は、たゞ、心に在るのである。

或る男、他で御馳走になつて、家へ歸るなり、

「あゝ、胸が苦しい。腹が痛い。早く釋を取つてくれ。」といふ。

「何うかしたんですか……おや、顔が眞つ蒼だ。何うしまして？」と妻が驚く。

「今、蛇を呑んで來た。」

「えつ、蛇を……眞實ですか。」

「嘘なものか。酒を出されて、盃を受けると、中に蛇が泳いでる。それをぐつと呑んぢやつたんだ……あゝ、苦しい。早く釋を……」

「まあ、大變な事をしたんですね。」

と、妻も蒼くなつてしまひ、顔へながら釋を取ると、夫は、それへ横になつた切り、頭も得擡げず、悶へ苦しむ。

盃中の蛇

四六一

◎正化の物見
花たり枯尾
句……古

死 生

四六四

蛇は、どこにもおなかつた。たゞ彼れの心中にゐた。差別は、物それ自身にありはしない。これ亦た、人の心中にのみ存在するのである。萬物が、平等一如に歸するならば、人もなく、物もない筈。彼れもなく、我れもない筈。従つて、生もなく、死もない筈である。

佛教の要は、この、我れないこと、即ち、無我の理を悟得するに在る。親鸞上人も、「佛法には、無我と仰せられ候……ゆめゆめ、我れといふことあるまじく候。」といつてゐる。差別をつけて我れといふその我れは、これ亦た、妄念の所産で、豁然として大悟すれば、我れは、直ちに、眞如の平等界中へ還没してしまふ。男波、女波、大波、小波と種々の名で呼ぶけれど、大觀すれば、漫々たる大海の水に歸する。それと同じことである。この理を諦観して、心身脱落、

左や右と企みし桶の底抜けて、水溜らねば月も宿らず。

の妙境に達するのが、佛教の根本義とする所である。

◎本心
知れば心
つくりば
在に物現

いひなが
我が身が
消えけり
……古歌

無外禪尼、初めの名を千代野といふ。城陸奥守の女で、金澤越後に嫁した。中年、夫に別れると、哀戚の餘り、心を禪に寄せ、佛光國師を禮して、髪を削り、名を如大と改め、別に無着と號した。一夜、月明に乗じて水を汲みに出た歸き、桶の底が抜けて、水を零した。乃はち大悟して詠み出したのが、右の歌である。佛光の印可を受け、京都の北に最景寺を創めた。今の眞如寺、それであるといふ。永仁六年十一月二十八日化す。壽七十六。

既に心身脱落の妙境に達し得て、我れといふものがなくなれば、又た、我れの死もない道理、その人は、無始の始めから、無終の終りに亘つて、常に生き通しである。火にも焼けず、水にも溺れぬ。その生は、死の如く、その死は、生の如くである。こゝに至つて、死、決して恐怖すべきものではない。

各名三の不便

死
生

對照
格書
修養百譚
終

四六六

大正七年十一月廿五日印刷
大正七年十一月三十日發行

修養百譚

正價金壹圓五拾錢



著作者 山田 愛 劍

發行者 高 倉 嘉 夫

印刷者 田 原 嗚

印刷所 忠誠堂印刷部

發行所

東京市神田區今川小路
電話本局四九六六番
總發東京二〇四三一番

合名 忠誠堂
會社

◀ 著名三の朽不 ▶

陸軍大將男爵 福島安正閣下題字
陸軍次官 山田隆一閣下題字

山田愛劍先生著

格言 訓話 日 日 の 修 養

七十 五版 總クローズ製美本 菊半截八百五十頁 正價金壹圓五拾錢 錢八料是

名著中の名著なり本書を同伴とし日日に一章を熟讀して日日に一徳を獲得せば玲瓏透徹玉の如き人格を得るこ
と亦難きに非らざるべし切に萬人の必讀を望む

陸軍大將男爵 神尾光臣閣下題字
陸軍大臣 大島健一閣下題字

杉田定一閣下題字
孤峰學人先生著

心 人 の 道

三十 七版 總クローズ製美本 菊半截八百五十頁 正價金壹圓五拾錢 錢八料是

碎けたる修養談他に比類なく適切なる例話巧なる比喩最も可なり一度本書を精讀せば快然として願を解きつつ能
く道徳の大本處世の眞諦を悟得すべし

男爵 遊澤榮一閣下題字
男爵 森村市左衛門閣下題字

鈴木魅先生著

精神 道 歌 物 語

四十 八版 總クローズ製美本 菊半截三百三十頁 正價金八拾錢 錢六料是

道歌は古來先賢の思想が結晶して三十一文字となれるもの言短くして意長く首々一讀三嘆の妙あり道歌の精神
は本書を傳ちて更に鮮々たる光輝を放つ

376
226

終